

(小児科)

○泉 紀子・萩島 恭子・杉浦 節子
大槻千枝子・川戸 英彦・福山 幸夫

1963年 Svensmark & Kristensen により報告された少量検体によるフェノバルビタール、ジフェニールヒダントインの同時測定法を検討、一部を改良改変した。さらにわれわれはこの改良法を用い髄液中のフェノバルビタール濃度の測定もこころみた。血漿 2ml または髄液 5ml をリン酸二水素ナトリウムで酸性にし、クロロホルムで、ジフェニールヒダントインおよびフェノバルビタールを同時に抽出する。PH 8.8のホウ酸緩衝液にてフェノバルビタールを分離抽出し、緩衝液層を二分し、一方に9規定塩酸 0.1ml を加え、波長 240m μ で吸光度を測定した。他方のクロロホルム層にはPH11.5のリン酸緩衝液でジフェニールヒダントインを分離抽出し、波長 235m μ と 270m μ の吸光度で測定した。

長期服薬患者約60例につき測定したところ、血漿中ジフェニールヒダントイン濃度については、単位体重当りの投与量と血漿中濃度との間に相関関係が成立したが、フェノバルビタール濃度は投与量と血漿中濃度との相関関係が不明瞭であつた。また他のバルビツール酸系薬剤併用者のフェノバルビタール濃度は、かなり高く出る傾向があり、体内におけるフェノバルビタールへの変換か、測定における干渉が考えられた。年令と血中濃度の関係をみると、体重当り同一量の経口投与により、フェノバルビタール血漿中濃度は、年令と共に上昇する傾向がみられたが、ジフェニールヒダントイン濃度は年令と特に関係がなく、一定であつた。

次に血漿中フェノバルビタール濃度と髄液中濃度の相関をみると、相関係数 0.736で、1%以下の危険率で有意であつた。経口投与における髄液中濃度の血漿中濃度に対する比をみると、長期投与では髄液中にフェノバルビタールが蓄積する可能性を示した。

12. 動脈硬化症における脂質代謝と血中プラスミン値について

(三神内科) ○木村 寿子・小山 千代・
野地 キミ・野々田宣子・米谷美津子
(中検・血液部) 中村恵美子

脳血管障害は、現在本邦において臨床的に最も重要な疾患の一つであり、その成因に対する検索、治療手段の検討が多面的に行なわれている。脳卒中のうち、脳血栓症は、そのほとんどが動脈硬化症を基盤として形成されることは衆知の通りであるが、動脈硬化の成り立ちについては、さまざまな学説があり、いまだ十分に解明され

ていない。しかしその成因については、従来脂質代謝異常、高血圧、血管障害、内分泌障害、ストレスなど多くの因子が考えられてきた。しかしこれらの因子が単独因子として動脈硬化の成因に関与するよりも、多くの因子の重複により、人間の動脈硬化がおこるという考え方が強くなつてきている。線維素溶解酵素(プラスミン)は、フィブリノーゲン、フィブリン、カゼインその他若干の合成基質を加水分解する酵素で、正常血液中にはその活性はほとんどみられず、各種の異常状態においてはじめてタンパク分解を示すという特徴をもっており、トリプシンとよく似たメカニズムをもっている。このプラスミンと動脈硬化との関係はどうか。正常な細胞・組織の代謝維持のためには、正常な細胞膜透過性が必要である。無酸素症、血行動態因子あるいは血管壁内の酵素活性の動脈硬化発生に対する役割も、血管壁の透過性の変化を介するものであり、この面からプラスミン酵素系および抗プラスミン物質は、血管壁の透過性に関係しており、最も直接的な動脈硬化発生の因子となりうる。すなわち、プラスミン活性値の亢進した場合も、逆に低下抑制された場合においても、動脈壁の変化の発生に対して意義がある。以上の観点から、私共は、眼底所見を基準として、動脈硬化症を分類し、これら患者について、その脂質代謝と血中プラスミン値を測定し、互に逆の相関関係にあるといわれる両者間の動態を検討したが、いささかこれに関する知見を得たので報告した。

13. 当科におけるくも膜下出血の症例について

(小坂内科) 高橋千恵子・○飯島彬子・
黒川きみえ・水野 美淳・小坂 樹徳

脳卒中のうち、くも膜下出血の占める頻度は必ずしも多くはなく、その多数についての臨床的ならびに病理学的検討は比較的報告が少ない。入院に至らずして死亡する例も多いと思われるが、当科(中山内科、小坂内科)に入院し、くも膜下出血と診断された症例は40余例に達したので、その経過、予後を中心として検討した。

患者の年令は、50才以上が約60%以上であるが、40才未満の若年者も約20%で、比較的種々の年令層に分布する。女子は男子の約2倍であつた。

約3分の1が入院中に死亡。数例は外科に転科したが、当科退院後の経過も追跡し、その成績を報告する。また脳底部動脈瘤結紮を行なつた例の予後、剖検例についてはその所見についても検討した。

14. 新生児急性腹症と人工腹腔応用について

(第2外科)

織畑 秀夫・太田八重子・山中 爾朗・

倉光 秀磨・岡 寿士・徳川 英雄・
大地 哲郎・○佐野鎌太郎

医学の進歩に伴い、新生児領域における手術症例の増加と好成績が報告されているが、未だ死亡率の高いものの中に、胃腸管穿孔による汎発性腹膜炎、囊破裂を伴う臍帯ヘルニア、横隔膜ヘルニア、腸間膜動脈血流障害による腸広範囲壊死などがある。

これらの直接死因をみると、術後呼吸障害が主で、炎症、壊死に続発する膨腸によるものや、脱出腸管あるいは臓器還納による横隔膜圧排によるものと考えられる。そこでわれわれは人工腹腔なるものを考案し、実験的にこれを腹壁に接着することによつて、腹腔の拡大、腹腔内圧の低下をはかり、また経人工腹腔的に抗生物質添加腹膜灌流液にて1日3回計3日洗浄する事により、汎発性腹膜炎にても安全に、かつ確実な消炎効果を得たので、血液学的、病理学的検討を加えて報告した。

15. 頭蓋内に異常石灰化像を呈した症例

(脳神経外科)

○松井 孝嘉・別府 俊男・本田 裕朗・
清水 隆・毛利 泰子・喜多村孝一

患者は42才の男性で、7年前に頭部外傷の既往があるが、その後特に異常なく経過して来たが、本年に入つてから、頭痛を訴えて、某院に受診したところ、頭蓋単純撮影に異常な石灰化像が発見されて、精査のため当科へ紹介された。

神経学的検査では、両側の深部反射が著明に亢進している以外に異常所見は認められず、内分泌学的検査、特に副甲状腺機能にも異常は発見されていない。レ線。石灰化像は、頭蓋単純撮影で正中線上にあり、形は蝶形を呈し、横画像では、ほぼ透明中隔のあたりに、大きさ4.5×3.5cm、そのすぐ後方に小さな斑点上の石灰化が2つ認められる。

頸動脈撮影では異常所見はなく、石灰化像との関係も認められなかった。

気脳撮影では、脳室は正常の約2倍の大きさに拡大しており、右側の側脳室には、気体が入つてゆかない、しかしそれによるシフトは認められなかった。髄液所見は、細胞数には異常なく、タンパクの著明な増加が認められた。この症例の異常石灰化の成因について検討、考察を加えた。

16. マイトマイシン C 大量衝撃療法について

(第二病院外科)

○梶原 哲郎・丸野敏次郎・坪井 重雄・
国吉 昇・山口 繁・今井 寛

小船井良夫・岩波 洋・井上 久司・
蒲谷 堯・阿部 泰恒・砂川 明雄・
鎌田 哲郎・原野 秀之

悪性腫瘍を細胞レベルの全身病として見るならば、悪性腫瘍に対する治療法としては、化学療法が唯一の手段である。われわれは過去4年間、マイトマイシンC大量衝撃療法を中心に悪性腫瘍に対する化学療法を行なつて来たが、今回はその統計的観察を行ない、その著効例と現在の化学療法の問題点に検討を加え報告した。

1) 投与方法：マイトマイシンC大量衝撃療法施行後、同種骨髄移植を行ない、その後代謝性拮抗剤5-フルオロウラシル(5-FU) 500mg週2回を長期使用する。以上を原則とし、術直後および全身状態の極度に悪い症例に対しては5-FUの投与を先行させ、後に本法を施行する。

2) 施行症例；転移癌、再発癌などいわゆる手術不能末期癌に本法を施行した。その内訳は、胃癌(78.6%)が大部分を占め、その他乳癌、子宮癌、直腸癌、肺癌などである。

3) 効果；a) 臨床効果；自・他覚的所見より著効59.4%，有効15.9%，無効13.0%，経過観察中11.6%で、特に疼痛の消失、腫瘍の縮小、通過障害腹水の消失等顕著である。b) 延命効果；2.5年以上生存4例を含め1年以上の生存は21例であり、他種制癌剤投与方法よりも著明な効果を示している。

4) 副作用；脱毛、食欲不振、悪心、倦怠感など見られるが、極めて軽微で一過性であり、その他の検査成績でも本法施行3週後には全例施行前に回復する。

5) 著効例；1) H.Y. 38才、女性、子宮癌兼骨盤、直腸、肺転移。2) K.S. 68才、男性、肺癌。3) N.T. 58才、女性、乳癌兼肺転移。4) K.H. 53才、女性、胃癌。5) A.T. 33才、女性、胃癌等症例について簡単に報告。さらに現在の抗腫瘍剤を効果的にするために、labilizerとしてデキストラン硫酸を使用して生体の線溶系酵素活性におよぼす影響を、フィブリノーゲン量、オイグロブリン溶解時間、溶解面積の測定等により検討した。さらにその使用によりいままでと異なる臨床効果を認めているので合せ報告した。

17. 疣贅様変化を多発した *Acanthosis nigricans* の1症例

(皮膚科) ○西島 明子

Acanthosis nigricans は悪性腫瘍を合併する悪性型と、これを伴わない良性型に分類される。主症状は、項、頸、腋窩、外陰を主として、大腿内側、肘窩、膝、